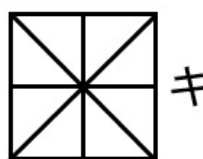
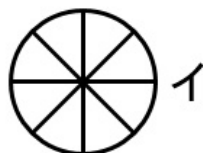
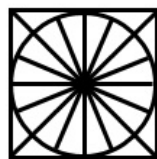
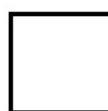
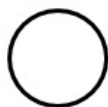


開祖の教え

－ 呼吸力 －

一
靈
四
魂
三
元
八
力



平成 30 年 10 月 13 日

千葉県合気道連盟

副会長 乾 泰夫

開祖の教え – 呼吸力 –

乾 泰夫

「合気」の定義

言霊が一音多義であるように、合気道という武道名の中の「合気」は一語多義で、三つの意味を持っています。

一つ目は「神人合一」です。大正 11 年に「大東流柔術」から「大東流合気柔術」へと呼称が変わった時のことですが、大本の出口王仁三郎聖師が「合気」に「神人合一」の意味を込めて、植芝盛平大先生（以下、開祖という）を通して武田惣角師にお願いをし、この「合気」を加えてもらっています。

『「合気」という言葉は古事にも見られるが、その意味は違うようだ。また道主（開祖）のいう「合気」そのものは、無限に深く、広く、道の発現の真意を至極簡単明瞭に現わし、神人合一の意を簡略にした意味をもつのである。』（真 164）

「夫れ武術は皇国の道に起り、百事神と人との合気より言霊表現の誠を以て基準と為し、誠の心即ち大和魂を更に体に練及し、誠魂の練磨統一と其の魂を以て肉身の統一を計り、心身に寸隙なき心魂一如の統一を以て誠の人を作るを以て目的とす。」（練 序文）

「夫れ技は水火の真妙を出し、天地の道又皇道（皇神の道）精神を画き、其業は言魂の妙用を示し、理は世界万有の教導となり、世界万有を和し、天地神人合一、和合たり。」（道 道文）

「神人合一」は「私は宇宙（宗教的には神）と一つなのです」（武 191）と同じ意味です。

二つ目は「愛」、「愛の気」です。神（万有愛護の存在）人合一に関連しており、大正 14 年の黄金体体験に基づくものと思われますが、よく口にされるようになったのは戦後のことです。

『その瞬間私は、「武道の根源は、神の愛（万有愛護の精神）である」と悟り得て、法悦の涙がとめどなく頬を流れた。』（武 17）

『「合」は「愛」に通じるので、私は、私の会得した独自の道を「合気道」と呼ぶことにしたのである。従って、従来の武芸の人々が口にする「合気」と、私のいう「合気」とは、その内容、本質が根本的に異なる。』（神 41）

「日本の武道はヒビキによって生まれてきたのである。これらは無限の力を生み出し、又、愛の力をもって世の人々を大切に育て導いていくものである。合気は愛也である。なかよく和合していくのである。」（新 S44.1.10）

「合気とは愛なり。天地の心を以て我が心とし、万有愛護の大精神を以て自己の使命を完遂することこそ武の道であらねばならぬ。合気とは 自己に打ち克ち 敵をして戦う心無からしむ、否、敵そのものを無くする絶対的自己完成の道なり、而して、武技は天の理法を体に移し、霊肉一体の至上境に至るの業であり、道程である。」（神示、悟 20、160）

「愛」は「天地の心（神の御心）」です。「万有愛護の大精神」と同じ意味で、次に示す一刀流の「合気（相手と気が合って合打となる）」とは全く違う意味です。

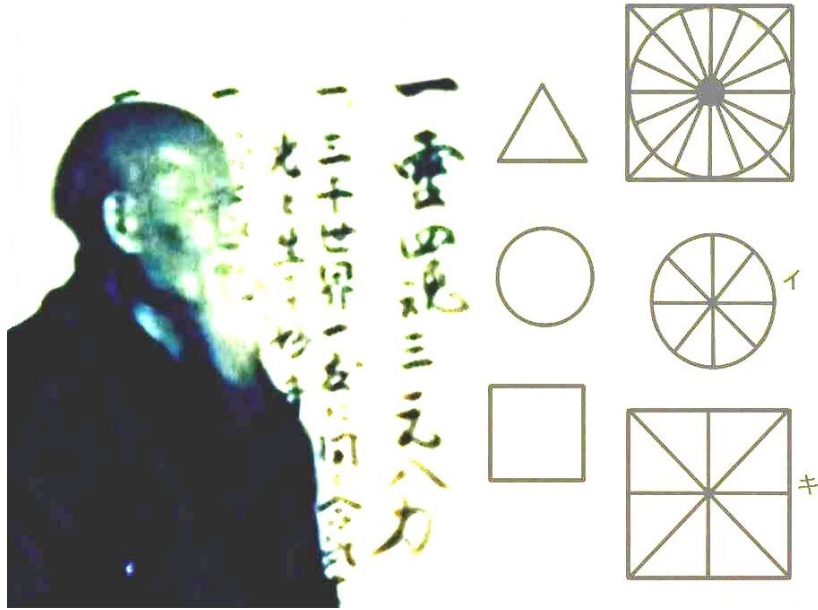
「**合打** 敵と打合ってどうしても合打となって中々勝負がつきにくいことがある。われが面を打つと敵も面を打ち、敵が小手を打つにわれも小手を打ち、われ突に出ると敵も突いてくる。われが一尺進むと敵も一尺進み、われが五寸退くと敵も五寸退く、いつまでたっても合気となって勝負がつかない。遂には無勝負か共倒れになることがある。」（『一刀流極意』笹森順造著 587）

また、「相手を崩して無力化する技術」という大東流の「合気」とも異なります。

三つ目は「△○□」です。これには中西光雲・清雲夫妻が関わっているようです。

「三角に入身して（入身一足の理）、丸に捌いて（円転の理）、四角におさめる（固成の理）」という合気道の技の動きを表したものです（探 4 号、『合気道講習会用テキスト』参照）。

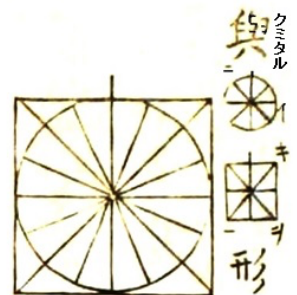
更に、開祖が座学で教えられた大切な意味があります（映画『合気道の王座』参照）。



「一霊四魂三元八力や呼吸、合気（△○□）の理解なくして合気道を稽古しても合気道の本当の力は出てこないだろう。」（開祖）

上の座学（映画の1コマ）の右側の図は山口志道（1765-1843）の『水穂伝（水火伝）』に載っているもので、そのまま『大本言霊学』（出口王仁三郎著）にも連なっています。一番上の丸と四角が重なった図は右に示す「イキを與たる形」（水穂伝 火之巻三）です。

「出息は水（イ）にして○なり。引息は火（キ）にして□なり。」（水穂伝）で、座学の左隣の図の○□になります。座学の図を見ると「合気」は「呼吸」から成っていることが分かります。



「はく息は⊗である。ひく息は⊠である。腹中に⊠を収め、自己の呼吸によって⊗を⊠上に収めるのです（補足 相手を自己の腹中に吸収して一体となること）。」（武 134）

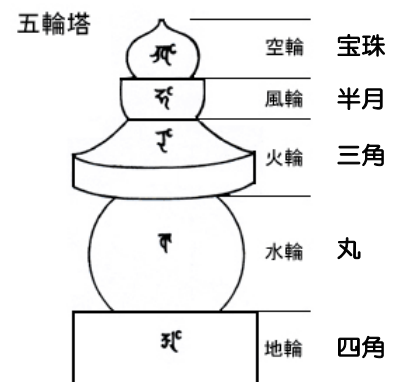
この「イキを與たる形」は、形象の類似性から、天の浮橋に立つことにも関連しているようです。

「天之浮橋は、丁度魂魄（火と水）の正しく整った上に立った姿です。これが十字の姿です。これを霊の世界（魂、火）と実在の世界（魄、水）の両方面にも一つにならなければいけない。

図で示すと⊠（ぬき）ㇿ（ポチ）となる（「イキ」即ち「ポチ（ス神）」となる）。」（武 155）

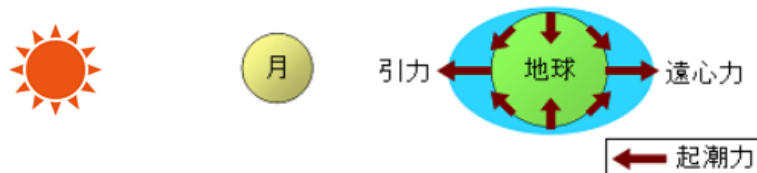
△は「これを物質的に見ますと△天・火、○水、□地であります。」（武 37）の△で、五輪塔の火輪であり、また開祖が「天・火」と意味を加えられた天です。それで五大母音（大本では五大父音）の「ア（天）、イ（火）、ウ（結）、エ（水）、オ（地）」から「ア」と読み、「△イキ」になります。五輪塔では火（△）、水（○）、地（□）です。

「今や武門はアオウエイの問題から起こって来るのであります。即ち△○□（補足 魂魄両面の意味があり、魄では入身一足・円転・固成の理。魂では神〈天〉の愛の気により呼吸を合わせて一体となり技を生み出すこと）の形の上に起こって来るのであります。」（武 36）



「息を出す折には丸く息をはき、ひく折には四角になる。そして宇宙の妙精（氣）を身中にまるくめぐらし六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）を浄め働かすのです。丸くはくことは丁度水の形（水にして○なり）をし、四角は火の形（火にして□なり）を示すのであります。丸は天の呼吸（日月の運行）を示し、四角は地の呼吸（潮の満干）を示すのである。つまり天（ア、△）の氣によって天の呼吸（○、イ）と地の呼吸（□、キ）を合わせて技を生み出す。」（武 45）

起潮力は、地球を引き伸ばすように働きます。



天の呼吸によって地の呼吸が引き起こされるイメージ図

△○□の図の左に「一^{いち}霊^{れい}四^し魂^{こん}三^{さん}元^{げん}八^{はち}力^{りき}」と書かれていますが、これは次に示す天の数歌（祝詞）に関する大本の教えが意味するように一^{いち}霊^{れい}四^し魂^{こん}三^{さん}元^{げん}八^{はち}力^{りき}（霊力体）によってこの世界が造られ、△○□が出て来たということを説明されています。それで開祖は、稽古の前後、また礼拝される時にいつも「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、万」と、この天の数歌を唱えられていました。

『・ひと（霊）：大宇宙の根源において独^{どく}一^{いつ}真^{しん}神^{しん}（主神、天之御中主神）がましまし、一^{いち}霊^{れい}のもとに勇親愛智^{あらみたま}の四魂^{にぎみたま}（荒^{さちみたま}魂^{くしみたま}、和^{くしみたま}魂^{くしみたま}、幸^{くしみたま}魂^{くしみたま}、奇^{くしみたま}魂^{くしみたま}）を統べておられる。

- ・ふた（力）：真神の営みである陰陽（高御産巢日神・神産巢日神）二元の組みあわせによって「八力（動静、解凝、引弛、分合の対照力）」が生ずる。
- ・み（体）：八力の複雑微妙な結合により、剛・柔・流の「三元」が生ずる。
- ・よ（世）：泥海のような世界ができる。
- ・いつ（出）：日月星辰や大地が誕生する。
- ・むゆ（燃）：草木をはじめ、諸生物が萌え出でる。
- ・なな（地成）：人類が生れ、地上の世界が成就する。
- ・や（弥）：その世界がますます発展する。
- ・ここの（凝）：充実安定を表わす。
- ・たり（足）：完成の域に達する。
- ・もも（諸）：さらにもろもろのモノが生ずる。
- ・ち（血）：大造化の血が宇宙をくまなく巡り、生命力が満ちる。
- ・よろず（夜出）：生成発展の光明世界が永遠に開けていく。』（『大地の母』出口和明著 10 巻 7 章 天地剖判、『霊界物語』17-3 後付「霊の礎(三)」参照）

「之を大括して略解すれば、霊^{れい}力^{りき}体^{たい}によって世が発生し、水火の呼吸燃え上り、初めて地成り、弥々益々水火の気凝り固^こりて完全無欠の宇宙天界は完成され」（『霊界物語』73-1-10）が一^{いち}から十^{じゅう}までで、「生産^{いくむすび}霊^{たま}（△）、足産^{たるむすび}霊^{たま}（○）、玉留^{たまづめむすび}産^{たま}霊^{たま}（□）の三元が整うと、宇宙全体の姿が出来上がる」（神 113）が百^{もも}千^ち万^{よろず}です。

「△○□の三元」は中西光雲・清雲夫妻によるもので、△と○と□の形象を合わせて「もちろ」と読みます（「もちろ」はひふみ祝詞にある百^{もも}千^ち万^{よろず}で、諸々のモノであり、また、△○□は宇宙の万象（様々な形）を形作る基本的な形象（図形、図鑑）である。次のように○△□と並び順が異なっても、この形象全体で「もちろ」と読む）。

『**もちろ**』 「もちろ」とは、「真理・原理・道理」、「気体・液体・固体」、「使命・生命・宿命」、「魂・命・靈」、「頭・胸・腹」等の如く、三種^{みくさ づかん}を凶鑑に表はしたものの、即ち○△□（もちろ）の事であり、淤能碁呂^{おのごろ}島^{しま}（地球）森羅万象万有の造化の元素原理より、生成発展の体用（本質・本体と働き）まで一切凡てが、この「もちろ」に包含されるものなのである。

神道に於ては、ひふみ祝詞^{のりと}に「もちろ（百千万）」という詞があり、仏教に於ては形として取入れ、譬へば位のあった人の墓などに、其の人が生前人間として為すべき、最高最善を仕尽上げたと云ふ意味を表徴して、△○□の形 所謂「もちろ」の墓（五輪塔）を建立して居る様である。然し現在迄神道にせよ、仏教にせよ何れも其の意味の解らぬ儘^{まま}に、宣^{のり}上げたり 象^{かたどり}を伝承して来たに過ぎない。

一切万有の造化生^{せいしゅつ}出は、気体より液体・液体より固体に、真理・原理・道理に基いて行はれ又死滅は其の反対の順序を以て執^{とり}行^{おこな}はれる。例へば H₂O に依て表はされる水も、水蒸気と云ふ気体から液体の水となり、この液体の水から氷と云ふ固体になる。又氷が変化するときも、之の逆の順序に従つて行はるる如く、本体は一つであるが時に従ひ巡りに合はせて、経^{へめぐ}巡りつゝ体（本質、本体）・用（動き、働き）を変化してゆく、其の造化の元素原理の象^{かたどり}を云ふ。又此際厳密に言ふなれば、この気体も更に気体・液体・固体に、液体も気体・液体・固体に、固体も亦気体・液体・固体に分れる事となる。従つて少くも現代の人文科学は液体迄の科学であつて、気体の科学は神霊化学（『武産合氣』の精神化学）に属すると云ふ事になる。

大神はこの「もちろ」を三種^{みくさ たから}の神器として物の具に象^{しょう}徴^{ちよう}された。即ち△－劔・○－玉・□－鏡である。そして是を以て人文々化の向上発展の土台とする様に示された。何処の神社に於ても神前に三種の神器を奉置して居る所以である。』（『ことたま』に依る十種^{とくさのおほはらひ}太^{ふる}祓^{へのはらひ}）の解明』中西光雲著 223）

大本の教え（前述の天の数歌）と中西光雲・清雲夫妻の神示による言霊的な解明（「もちろ」の三元）とを融合されたのは開祖のようです。開祖にとって「合氣」は天授の真理に基づく武で、神示によって与えられたものでした。この融合によって、△○□（もちろ）は△○□^{アイキ}ともなるのです。

「合氣道とは、天授の真理にして、武産^{たけむす}の合氣の妙用であります。」（武 28）

「武産合氣は私が造ったのではない。宇宙の営みの移りかわってくるに従つて、遂に現れて来たのである。」（武 153）

「このような今日の時代になって、神示によってはじめて現れたのが武産合氣である。」（武 56）

「武産合氣」の定義

武産合氣の「武産」にも三つの意味があります。

一つ目は「武を産^うむ」です。

「合氣道の技は、すでに決まったものではなく、相手との攻防の中で産まれ出る、創出されるのである。武を産み出す武道が合氣道である。」（武産合氣の説明）

二つ目は「産^{むす}びの武」です。「産び」という原理によって無限の技が生まれてくることです。

「武産とは合氣道の原理を研鑽することにより、無限の技が生まれてくると言う、実技の問題である。」（武産合氣の説明）

技だけでなく、産び（結び）という原理（理合）も実技化出来るものです。

三つ目は「さむはら」です。この言葉は武産と同じ意味で、言霊解（言霊に依る解明）は「開く、孕^{はら}む（吐く、吸う）ことによる結び」です。合氣道の原理の「産び（気結び、生結び）」が根幹となった「呼吸（力）」という意味です。

「常盤に堅盤にゆるぎなく天、武産さむはらの合氣、もとより愛と光に満々と、赤氣・赤血^{せつき せつけつ}をたぎらせ八尺^{やさかにのたま}句玉の五ほつ統一^い（御統を開祖が統一と変えられたか？）のたまの真根基（根本、根底）、ここによりここにうしはぐ（領^{うしは}く：領有し、治める）べし。」（神 78）

開祖は、よく重言（「今、現在」のような重複表現、トートロジー、Tautology）を使って表現されています。この「武産さむはら」も重言で、『武産』即ち『さむはら』ということです。「さむはら」は「^{あめ}天の村雲九鬼さむはら竜王」の「さむはら」です。武産合気が天の村雲九鬼さむはら竜王からもたらされたという意味以外に中西光雲・清雲夫妻の言霊解による次のような意味があります。

『さむはら 「さむ」一開いて結ぶ、「はら」一^{はら}孕んで結ぶ意。

大自然を土台として、夫々の因と果に成り表はれる武の働きを謂ふ。

万有ならば、天地人の理合を先ず第一に知り（仏の事を天地人の“調合師”と謂ふ）この三^{さんげん}玄の和に結びて科学する業^{わざ}・力を云ふ（三玄：三つの奥深い道理、則ち三元：根本的な三つの原則）。

電気を孕んだ雷が、電光石火の早業を以て偉大なる働きをする。是自然の気の「さむはら」である。

又一粒の草種が季節の節に合わせて芽を出し、茎に^{くき}応じて丈夫に根を張り、巡りに合はせて花を開き実を稔らせる。是を「さむはら」の武と云ふ。』（『「ことたま」に依る十種太祓（布留部祓）の解明』中西光雲著 242）

「さむ」を漢字で表すと「^{さむ}醒む」で、眼が開き眠りから覚めるという意味で、ここから「開く」となります。

「開いて結ぶ」は息を吐いて結ぶ、「孕んで結ぶ」は息を吸って結ぶという意味です。

「天の村雲九鬼さむはら竜王、この御名の中に合気の技が含まれているのです。」（神 154）

Ⅲ さむはら

「さむ」——開いて結ぶ、「はら」——^{はら}孕んで結ぶ意。

大自然を土台として、夫々の因と果に成り表はれる武の働きを云ふ。

万有ならば、天地人の理合を先ず第一に知り、（仏の事を天地人の調合師と謂ふ）之の三玄の和に結びて、科学する業・力及其の作用を云ふ。

電気を孕んだ雷が、電光石火の早業を以て偉大なる働きをする。是自然の気の「さむはら」である。

又一粒の草種が、季節の節に合わせて芽を出し、茎に^{くき}応じて丈夫に根を張り、巡りに合せて花を開き実を稔らせる。是を「さむはら」の武と云ふ。

参考：『国家・国旗・国名の解明』中西光雲著 96

『「ことたま」に依る十種太祓（布留部祓）の解明』には「造化生成の^{たけ}武むすさむはらの氣」（236）、「この精進練磨と自ら^{さには}審判・^{さわけ}狭別するさむはら、正勝吾勝（正しく勝ち吾に勝つ）の氣が、縦横に確と生^{たてよこ}枝^{しか}（結びつくこと）されて」（27）、「物と心が^お合氣結合して命を保つて居る」（216）など、合気道に関連する言葉が重言で示されています。

開祖は、昭和 12 年に中西光雲・清雲夫妻に初めて会いました。その経緯は次のとおりです。

『中西夫妻が修法研鑽に明け暮れていたときに出会ったのが、合気道の開祖・植芝盛平だった。

その出会いは、茨城県岩間町に住んでいた大本教信者・赤沢善三郎（原文は善五郎）という人物の仲介による。中西夫妻に心酔していた赤沢が、彼らの活動を植芝盛平に話したところ、植芝が非常に興味を持ち、昭和 12 年のある日、突然、東京・板橋の大山に住んでいた中西夫妻のもとに訪ねてきたのである。

ちなみに、植芝は大正 9 年（原文は 7 年）に大本教に皈依し、大正 13 年（原文は 14 年）には出口王^お仁三郎^{にさぶろう}の用心棒として王仁三郎と蒙古へ同行、パインタラ（白音太拉、中国名は内モンゴル自治区の通遼）で遭難し（張作霖の策謀により落命寸前の危機に遭う）、あやうく救出される一幕もあった。帰国後、植芝は大本教団とは一線を画し、合気道の研鑽に努めていたのである。

植芝は中西夫妻に対して「合気道（「合気道」という武道名は昭和 17 年大日本武徳会で付けられたので、

この時点では「合気」ではなかったか？）という気の原理（後述の武産合気の神示にある「愛の気」がその答えか？）を開眼するために指導を受けたい」と申し入れてきたという。

そのころ、中西夫妻は「日高の法^{ほうでん}伝」のために奈良の葛城山で参籠修行しなければならなかったが、それを一時延期して、植芝のために合気道に関係する神々を降ろして秘伝を教授した。また、古来の武具のいわれや合気と気合の相違など、いろいろ伝授したという。

その後、太平洋戦争となり、昭和 16 年に赤沢が中西夫妻を岩間町に招聘、夫妻はその地で翌年から本格的に『古事記』（ここにいう『古事記』とは、神より特別に清雲に下賜されたもので、正式名称は『布^ふ斗^と麻^ま邇^に古事記』といわれるものである）をベースにした言霊の解明に挺身することになる。この研究は単に書斎的なものではなく、法座（人間の理性や知性では解決できないような問題がある時、それを担当する神々に降臨を願い、その方法や教示を得るために立てる御座^{おざ}。人を神域の世界へ誘う時刻とされる^{午^ひ前^{まへ}二^に時^じ}の刻に部屋を清めて、四天に香を焚いてから行う）を立てて霊的に順次調べて解明していくという、神秘主義的なアプローチの異色のものだった。

具体的には、清雲（中座、霊媒）が神憑りになって『古事記』の一字一句を口述、光雲（前座、^{きにわ}審判）がそれを書紀するのである（口述内容を法座帳に記録する）。一回で 2 時間から 3 時間かかるが、それを毎日、3、4 回も繰り返すのである。

『古事記』の解明のために清雲に神懸った担当の神は、^{ひたちことしろぬしのみこと}常陸言代主命。その前身は、岩間の愛宕山の十三天狗のひとりであった。』（月刊『ムー』1997 年 4 月号 179 中西清雲氏へのインタビュー記事「古神道を現代に甦らせる中西清雲」）

中西光雲氏は和歌山県生まれの日蓮宗系（密教）の修験者で、神典といわれる古事記を言霊によって解明しようとされた在野の古事記研究家です。中西（旧姓 秋山）清雲氏は群馬県生まれで、12 歳で神秘的靈感を得、14 歳から中座（神の依代）として本格的な修行に入り、16 歳で神道扶桑教神事部より権少講義（神職の免許）の特例を受け、池袋に神占道場を開いていた方です。

「武産合気の神示」が昭和 17 年に降ろされています。

「この武産の言葉はいつ頃開祖に現れたものであろうか。

翁に、御神示として降ろされたのが、昭和 17 年であったことが、最近の調べで分かったのであるが、どのようにして、翁に降ろされたか、その詳細を知ることにはできない（詳細は前述のインタビュー記事のとおり）。

武産の言葉が降ろされたのは、猿田彦大神の御神示と記されている（^{あまつかみ}天津神の天の村雲九鬼さむはら竜王の^{みこと}御言を^{くにつかみ}国津神の猿田彦大神が神懸りによって伝えた）。

その御神示を列記して、大神が、翁に対して何を与えようとなされたのか、いま、その奥を究りたいと思うのである。

- ◎ 武産の武を法座を以て使命付けられてゐるものは汝一人以外に過去現在にない。この有難い使命を精神を以て達成する様努力を以て貫け。
- ◎ ^{はく}魄の武と組織に対しては隠居して終え、隠居する年になって武産の武の使命が大神から授かった因縁を思え、魄（肉体・実相の武）をすてて^{こん}魂（精神・霊の武）に精進して武産の武を楽しんでいせ。
- ◎ 無手の戦いは^{こん}魂のひれ（比礼）振りじゃ。武産の武の精進は^{ここ}茲から出発するのじゃ。
- ◎ 型を破って型なき型を工夫せよ、いくらでも機に応じて型が形に添って結び生じる。これが魂の武産である。自在の生みの氣を結ぶことが肝要ぞ。
- ◎ 自然の力、仕組を念頭において、之に合う所の自然の武を生み出すのが武産なり。常に新しきを生み出すのが武産である。
- ◎ ^{みな}皆、^{くう}空に愛の氣を生じて一切を抱擁（同化、吸収）する。之、武産なり。

- ◎ 種を有しても大地が愛をすくってうけてくれねば結び生ぜぬ。故に、^{はじめ きざし}初の兆の愛の氣に結びて武産の愛の氣を以て業を生め、一時のからくりでなく、神業の神力が生じてくる。
- ◎ 魄の觀念信念にとどされて、常に気ぜわしく、心乱して、物の仕組に明け暮れ、心を煩わすのは、武産の精進とは、はるかに違ふぞ。
- ◎ 天地の理に即応した変化自在の創造が武産の本義なり。
- ◎ 武産の武は、形より心を以て、本とし、之の魂のひれぶり、武としての活躍なれば、之大神の愛の^{きむすび}氣結である。
- ◎ 自然の力、仕組を念頭において、之に合する所の自然の武を生出すがのが武産なり。
- ◎ 武は常に変化を以て生命とする。^{つね}常に（いつも）^{つね}恒に（いつまでも）新しきを生み出すのが武産である。
- ◎ 型を破りて型を創造生成発展すべし、武産の武は廣大且つ微妙なり。
- ◎ 武を授ける時は、武産のことあげ（「ことば」によって明確に示すこと）を用いよ。
- ◎ 眞の武は武産の意義を^{あきらか}「明」にするにあり。
- ◎ 武産には眞の自在がなければならない。魄には行き詰りが来る。
- ◎ 魂のひれぶりは自在にして極りなし、これ武産の極意なり。
武の極意は形はない、心自在に生ず、これ極意なり。
- ◎ 形をすてて心の精進を第一義として武産の武を火の玉となって求めよ。
魂の土台がしっかりと中心に定まらねば、枝葉の術や、仕草は、無駄となるぞ。
- ◎ 武産の武に精進するは魄の為にあらず、これ魂の縁の結びなれば、よく肝に銘じて心得よ。
- ◎ 魄は人の身にとりて必要なもの故、其眞義を悟りて魂のひれ振りは此魄の表れによるもの故、身と心、二つが一つになって武の変化を生む故、なくてはならぬ魄である。
只、魄を主として心を第二にする順序の、てんとう（転倒）、むじゅん（矛盾）をただ（正）すために魄をすてろと申すので、決して魄を不要とするに非ず、魄はむしろ大切なものである。
- ◎ 今日まで、神の使命にたずさわって武をなしたる者、一人もなし、植芝として感泣して精進せよ。
大神が翁に授けた神示は、まことに厳しいものであった。

翁（開祖）は御神示を受けられた頃は、戦争中でもあり、心身共に疲労の極に居られたと思うのである。それは、それまでのある年月を、魄の世界を御自分の意志に反して歩かざるを得なかった（「武は愛なり」の愛を表にだせなかった）ことから、生じたことである。その極に達したとき、大神の御神示が降ったのであろう。

これからは魄では駄目だ、魂の世界を火の玉になって精進せよと警告されたのである。」（悟 42）

神示を受け、武産の武の使命達成に精進する過程で「呼吸力」という言葉が造られたと思います。^{ふた}「二は^{ちから}力也、吹く^{いき}呼吸也。」（『靈界物語』73-1-10）から着想を得られて「呼吸」と「力」が結びついたのかも知れません。^{いき}呼吸は水火です。水火の力（^{いき}氣の力）については次のとおりです。

「スの言靈は鳴り鳴りて、遂に大宇宙間に火と水との物質を生み給ふ。^{そもそも}抑々一切の靈魂物質は何れもスの^{ことたま}言靈の生むところなり。而して火（^ひ靈）の性質は横に流れ、水（身）の性質は縦に流るものなり。故に火は水の力によりて縦にのぼり、又水は火の横の力によりて横に流る。^{げんれい}昔の言靈学者は火は縦にして、水は横なりと言へども、其の根元に至りては然らず、火も水なければ燃ゆる能はず光る能はず、水も亦火の力添はざれば流動する能はず、遂に凝り固まりて氷^{ひょうちう}柱となるものなり。冬の日氷は火の氣の去りし水の本質なり、此の理によりて水は縦に活用をなし、火は横に動くものなる事を知るべし。

天界に於ける光彩炎熱も内包せる^{すみき}水氣の力なり。紫微天界（「幽の幽」の意志想念の世界）には大太陽^{しび}

(陽) 現れ給ひて左旋運動を起し、東より西にコースを取るのみにして、西より東に廻る太陰なし。炎熱猛烈にして神人を絶対的に安住せしむる機関とはならざりしかば、茲に太元おほもとあきつを顯津男の神は高地秀の峯にたかちほのぼらせ給ひ、幾多の年月の間、生言いくことたま靈を奏上し給へば、大神の言靈宇宙に凝りて茲に大太陰(陰)は顯現されたるなり。而して大太陰は水気多く火の力をもつて輝き給へば、右旋運動を起して西より東にコースをとり、天界の神人を守らせ給ふ。天之道立あめのみちたつの神は大太陽を機関として、凡百の経綸を行ひ給ひ、太元顯津男の神は大太陰を機関として宇宙天界を守らせ給へば、茲ここに天界はいよいよ火水くわすみの調節なりて以前に勝る万有の栄を見るに至れり。」(『靈界物語』73-1-12 水火の活動)

「昭和 17 年(1942 年)私が稽古を始めた合氣武道の頃には、呼吸力の養成法として、呼吸法の業があった。しかし、どうしたら呼吸力が出るか、呼吸力とはどのような力なのか、それを説明し、指導する人はいなかった。ただ呼吸法としての形があるだけであった。」(悟 165)

昭和 13 年刊の『武道』には、「呼吸力の養成」は「氣力の養成」(道 36)と書かれており、「指先に力を入れて精神を集中し刀を振り被る心持ちにて」(道 37)という説明になっています。氣はイキとも読みますが、「敵剣を以て我を討たんとする時、我左足前にあれば敵をして我呼吸より来る理の拍子を以て横入身の構の体勢になりて、右手にて後の敵を斬りつつ間髪を入れず後足即ち右爪先にて大地をけり、左足にて突進、(敵の右)後方に入身をなし、同時に左手を以て敵の右後部より薙ぎ、直ちに右足を敵の後方に踏込、敵の体勢を崩さず両手にて敵を倒すべし」(道 2 修行の方法)と、まだこの段階では「呼吸」も生理的呼吸(又はタイミング)の域を出ていません。

「呼吸力」の要素

武産合氣の原理が「産び(結び)」で、結びが根幹となった「呼吸(呼吸力)」ということが分かりましたが、成書には理合的(技術的)にどのようにして養成したら良いかが明らかではありません。どのようにすれば身に付けることが出来るのか実際に本部道場に問い合わせた人がいて、その時は「師範方がそれぞれの考えによって稽古されてます」という答えであったそうです。

その師範方の中には「大東流の合氣」に対して「合氣道の合氣」という表現をされたり、大東流そのままに「抜き合氣」という言葉が使われたりで、「呼吸力」という言葉が消えかかって来ており、定義も「無力化する技術」と、大東流と変わらないのではと疑問に思うものも見られます。

「呼吸力」という言葉は『武産合氣』と『合氣神髓』にはありませんが、類似の言葉で「武産の武の阿吽あうんの呼吸の理念力」(神 12)、「氣魂力を養成し」(神 53)、「合氣道は、三つの鍛錬を実行してこそ、真理の力が心身に加わるのである。」(神 129)、「自己の愛の念力ねんぴかんのんりき(念彼觀音力)」をもって相手を全部からみむすぶ(神示の「一切を抱擁する」)。」などと書かれています。

『合氣道』に「道主を中心とした或る座談会」の記事が載っていて、開祖が「相手に対して、勝つか負けるか、などということはないんです。それだから、合氣道においては常に相手がなく、相手があっても、それは自分と一体になっていて、自在に動かせる相手なのです。」(合 201)と話されていますが、これこそ呼吸力によるものです。したがって、「一体化する」が一つの要素になります。

一体化をするために「人の目を見たり、相手の技を見たり、姿を眺めているんじゃないですよ。全部自分の腹中へ、身の内へ入れてしまうんですよ。自分の腹の中に在るんだから別に争う必要が無い。大宇宙が自分に在るという事や。全宇宙が自分の腹中に在る事や。」(『合氣ニュース』142 号 昭和 40 年頃のラジオ会見記)と、全宇宙の中心である自分の腹中に吸収することも呼吸力について語られたことです。したがって、この「腹中に吸収する」も要素になります。

「合氣道は相手が向かわない前に、こちらでその心を自己の自由にする、自己の中に吸収してしまう。つまり精神の引力の働きが進むのです。そしてこの世界を一目に見るのです。今日ではまだほとんどの人ができません。私もできていません。」(技 262、武 83)

相手を自己の中に吸収することと世界を一目に見るとことを開祖が目指されていたということが「私もできていません」と謙遜されている言葉から分かります。

開祖の技は、昭和 35 年 NTV 製作の映画『合気道の王座』の中で、「翁の技は、舞っているかのように軽く相手を投げ、しかも投げられた者はどこに力を入れられて投げられたのか分からないと言う。」と形容されています。

実際に受けを取られた弟子の先生方は、次のような感じを受けられたと述べられています。

「若い頃は隆々たる体格で技も稽古も相当厳しかったと聞いていますが、その頃は技を掛けられると柔らく吸い込まれるような感覚でした。触れた途端、気がつくやうと倒されていました。」（菅沼守人先生）

「ある時期、私は不思議なことに気がついた。先生に近寄ったとたん、自分の心と体が何か透明な感じになる。そして先生に触れると、それはよりはっきりして、まるで自分と先生の心と体の境の区別が、無くなったような感じとなるのである。それは先生の修行で得られた、対峙を超えた心から生じる大きな気（^{イキ}気力）が、我々を包み込んだのであろう。」（多田宏先生）

「腹中に吸収する（吸い込まれるような感覚）」と「一体化する（自分と先生の心と体の境の区別が無くなったような感じ）」という稽古が「引力の鍛錬」（神 101）、「引力の錬磨」（武 32、155、190）となります。呼吸力習得のためには、このような感覚が手掛かりになると思います。

吸収して一体化したら、次は「無限大の宇宙一杯に神の気（愛の気）を吐いて浄める」ですが、これも呼吸力の要素になります（「小戸の神業」という）。

「それは丁度、体の方では潮の干潮のようなもので、波が来る即ち（相手が）打って来ると波のはなが散るように陽になって音を生じる。息を吸い込む折には只ひくのではなく、全部己れの腹中に吸収する。そして一元の神の気（愛の気）をはくのです。それが社会の上なれば、自分の宇宙にすべて吸収して、また社会を神の気で浄めるということになります。」（武 82）

「この浄めの業を行ってゆけば、天火水地のご経綸の道（万有愛護、生成化育の道）は、自然に明らかになってくるのである。」（武 90）

「**註** 植芝先生の合気道演武は、邪気邪霊を祓うお浄めである。技をふるわれる時、その突く瞬間、ひく瞬間、邪気邪霊をはらい、そして一つ突けばたくさんの魔性がふきとび、一つ引けば無数の悪魔が浄められる、と五井（昌久）先生より教えられました。」（武 91）

もう一つ大切な要素があります。それが「産び（結び）」です。「一体化する」ために欠かせないもので、「腹中に吸収する・吐いて浄める」のように理念（阿吽の呼吸の理念力）としてではなく、理合（技術）として理解する必要があります。産びは「古事記の営み」の核心です。開祖は、高御産巢日神、神産巢日神の働きで説明されていて、摩擦（摩擦連行）作用と表現されています。前述の『霊界物語』73-1-12「水火の活動」とも照らし合わせて下さい。

「水と火との動き、つまり高御産巢日（霊系、火）、神産巢日（体系、水）の二神の、右に螺旋して舞い昇りたまひ、左に螺旋して舞い降りたまふ御行為によって、水精火台（水火の精台、天の浮橋）の生じる摩擦作用（摩擦連行作用）の模様と全く同一形式なのであります。」（武 44、77 も参照）

「右に螺旋して舞い昇りたまひ、左に螺旋して舞い降りたまふ御行為により、水火の精台の生ずる摩擦連行の、様相根元（核心）をなし」（神 77）

『武産の武（宇宙と結ばれる武）の結びの第一歩はひびき（気、波動）である。五体のひびきの槍を阿吽の力によって、宇宙に拡げるのである。五体のひびきの形に表われるのが「産び」である。すべての元素である。元素は武の形を表わし、千変万化（元素と元素が結びついて万物が造られること）の発兆の主でもある。

呼吸の凝結が、心身に^{みなぎ}漲ると、己が意識的にせずとも、（相手と対峙した時に）自然に呼吸が宇宙に同

化し、丸く宇宙に広がっていくのが感じられる（雄大な気持ちで相手を包む段階）。その次には一度広がった呼吸が、再び自己に集まってくるのを感じる（腹中に吸収する段階）。

このような呼吸ができるようになると、精神の実在が己の周囲に集結して、列座するように覚える。これすなわち、合気妙応の初歩の導きである。合気を無意識に導き出すには、この妙応が必要である。

こうして合気妙応の導きに達すると、御造化の御徳を得、呼吸が右に螺旋して舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火の結びを生ずる、（一体となり自在に動かせる）摩擦連行作用を生ずる。

水火の結びは、宇宙万有一切の様相根元をなすものであって、無量無辺（無限大）である。

この摩擦連行作用を生じることが、できてこそ、合気の神髄を把握することができるのである。』（神 87）

大本では、この高御産巢日、神産巢日の神の左旋、右旋運動によって宇宙が出来たと教えられています。

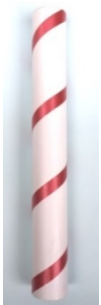
「高銚（高御産巢日、霊系）の神は左旋運動を開始し、神銚（神産巢日、体系）の神は右旋運動を開始して円満清朗なる宇宙を構造し給へり。茲に於て両神の活動は無限大の円形を造り給へり。」（『霊界物語』73-1-2）

前述の座学で示されている道歌「いづとみづ^{アイキ}と生りし黄金橋（天の浮橋） 富士（天之御中主の神）と鳴門（高御産巢日、神産巢日の神）の仕組なるかな」もこのことを詠んだものです。

右旋（右回りに昇り）、左旋（左回りに降りる）は下の図のような螺旋になりますが、稽古の時には交互に左半身と右半身で行うので、左回りに舞い昇り、右回りに舞い降りるということもあります。

「気の仕組みは向こうから歩いてくる。それを迎えにいてやる愛の教育、人を殺す教育ではない。そしてキリッと円を描く。愛の教育、伊邪那岐、伊邪那美 - 息陰陽水火ならんでまわる。」（神 94）

「自分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空の中心（神 80 の「皆空の御中心」と同）、中心は虚空（腹中）にあるのであり、自分で書いていき、丸く描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。きりりっと回るからできるのです。」（神 154）



この右回り、左回りは『古事記』で伊邪那美命（陰）、伊邪那岐命（陽）が天之御柱の周りを回られた方向です。気も右回りで陰から陽に（エネルギーが蓄積される）、左回りで陽から陰に転じる（エネルギーが放出される）ので、元は同じ理から来ていると思います。

『合気道は「小戸の神業（禊の業。二尊が行われた産びの業は岐美の神業）」で、丁度、那岐、那美二尊が地球修理固成、すなわち伊邪那岐、伊邪那美と、高皇産巢日の神、神産巢日の神さまが（二尊に）化身されて地球修理固成をなされた道なのです。』（神 50）

実際に開祖は、「合気道は、伊邪那岐命、伊邪那美命が（爺の）体内に入り行っているのじゃ」と演武の際に話されています。体内とは腹中で、臍下丹田とか正中軸をイメージすることが出来ます。そこで結びが行われるのです（「岐美の神業」という）。

正面打ち第一教であれば、すり上げ面で相手の手と自分の手が触れるまでが「舞い昇る」で、斬り下ろす時が「舞い降りる」です。

このような稽古を続け、対峙を超えた力が発揮できると、相手も自分も喜びを感じるようになります。

「合気道で宇宙の魂を磨く者は、この源（宇宙の真理）をよく究めて、宇宙の真理にかなない、宇宙の御心^{みこころ}にかなうように、万有愛護の心をもって、世の中の生きとし、生けるものに喜びを与えるように接しなければならない。このことは、やがて己れに宇宙の喜びの大声に迎えられる日がくることなのである。この喜びは合気道を稽古するものの務めの一つを完遂することになる。」（神 114）

かくして、合気道修行の根本の目的である「地上天国建設」がなるのです。

「かくて合気道は、地上天国建設のため、宇内^{うだい}（宇宙）の完成に進むのであります。

合気道とは宇内を^{ことごと}悉くみそぎ、森羅万象の罪障、邪気邪念を祓い浄め処理するところの大道なのであります。

その方法は言霊（愛の言霊：好く好かぬの「ス声」）によってするのであります。

合気の道は愛を守るの道であります。愛なくばこの世の一切は成り立たないのです。故に合気の真の働きがなければこの世はつぶれると私は信じているのであります。（中略）合気とは、宇宙の中心に立って、ただよえる世を立直す役目を持っておる処の一つの道であります。

自己をみそぎ、人を国を宇内をみそぎ、神の名によって進むのであります。」（武 33）

「だが、語るはやすく行うは^{かた}難し。ひびきが全宇宙に拡がっていくように鍛錬しなければならぬ。地上天国の建設である。」（神 20）

「結び」の理合（技術）とメカニズム

「この武道は神様から授かったお道やで、3 ヶ月やったら天下無敵になるのや。」（悟 150）

「今迄の武道は、長い年期を入れないと自分になれなかったのですが、私はすぐにも了解し得る道を開いたのであります。それだけ今迄の武道と合気道とは違うのであります。（中略）生^{いきとお}通し（肉体の死後、魂が霊界へ復活して生き続けること）の生命を腹中に胎蔵し、宇宙も悉く腹中に胎蔵して、自分が宇宙となるのであります。自分が宇宙と一体となるのであります。（中略）宇宙と一体となった自分の振舞いが、宇宙に輝やかに鳴りひびいてゆくのであります。」（武 70）

開祖のお話のとおり、「結び」を会得するには3 ヶ月もあれば足ります。肉体的な鍛錬ではなく、腹中の動かし方だからです。動かす腹中は、臍下丹田とか正中軸（新陰流の「人中路」、体幹）で良いと考えます。

例えば、立技片手取り呼吸法で、自分の右手を相手が左手で掴んできた場合、掴まれた右手首を動かさず、自分の臍下丹田（とか正中軸）がストンと落ちたと感じてから、次に肩の力が抜けて肩が下がり、肘が下がると思います（肩と肘は省略できる）。そうすると、特に意図しなくても手首が下がります。

それから手刀を振りかぶると、不思議なことに相手が付いて来ます。相手が手首を掴むまでが「舞い昇り」で、このストンと落ちた時が「舞い降り」です。

後は、相手と一体となって、無限大の宇宙の中心である自分の中心が動くと、無限大ですから宇宙の全ての場所が悉く中心となって一緒に動くので、相手を自在に動かします。

螺旋運動は、体の入身、転換を伴っているので、特に意識する必要はないと思います。

腹中をストンと落とすのではなく、ストンと落ちたと感じるところがポイントです。

膝の力を抜いてストンと落とそうとすると、大脳が命令してから 0.5 秒掛かって膝の筋肉が動きます（随意運動）。これに対して相手は小脳で反射的に対応します（反射運動）。予測制御という姿勢制御のためです。この反射に要する時間が 0.2 秒ですから、自分が 0.5 秒掛かっていたのでは、持たせた手首に相手が重く押し掛かってきて、思わず腕に力が入ってしまうのです。

ストンと落ちたと感じると、自分も反射運動によって 0.2 秒（又はそれ以下）で体幹部が動き、その動きに相手が吸収される（誘導される）ようになります。私は、これが「結び」ではないかと考えています。

この体幹部の動きは、自転車に乗ったときにバランスを取っている動きですから、3 ヶ月もあれば身に付けることが出来る道理です。

新陰流に「折り敷く」という動作があります。立った状態から一気に沈み込み、左膝をつき、右膝は立てて座る動作です。準備運動を伴わない不思議な速さの動きで、相手がこれに応じることが難しいそうです。この「折り敷く」技術について次のように書かれています。

「体を沈める時にほんの一瞬、それは実にほんの一瞬だけですが、両足を床からわずかに離すのです。離して、沈むのであって、決して跳び上がってはいけません。跳び上がっては、当然ながら逆効果になります。両足を離して、沈んで、着地した瞬間に切りが収まっているようにする。」（『剣の法』前田英樹著）

体が沈むと思うだけであると考えますが、落ちたと感じるのと同じです。一瞬体が浮いたようになるのを「吊り腰」と言いますが、天の浮橋に立つ（武 72 の「自分の想念を天にも偏せず、地にも執かず、天と地との真中に立つて」）という感覚も同じかと思います。

「吊り腰」が「舞い上がる」で、「折り敷く」が「舞い降る」であると考えて良いでしょう。

誰にでもこの違いが分かる方法があります。それは手を真上まで垂直に挙げ、その手で腰の高さに差し出した相手の手を打つというやり方です。この時、相手には打ち下ろす手を避けるよう^よにしてもらいます。こちらが頭で考えて手に力を込めたり速く打とうとすると、相手は容易に避けることが出来ます。

しかし、自分の中心（臍下丹田か正中軸）がストンと落ちたと感じて手を振り下ろすと、相手は避けられません。手が当たった時に痛いと感じる度合いが大きいので落下速度も速いと思いますが、予備動作がないので起こりが分からないのです。

『合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、「我はすなわち宇宙」なのである。

そこには速いとか、遅いとかいう、時間の長さが存在しないのである。この時間を超越した速さを、^{まさかつ}正勝、^{あがつ}吾勝、^{かつはやひ}勝速日という。』（神 34）

このようにして、相手と力の争いをする心配が無くなると、相手を包む様な雄大な気持ち（五体のひびきの槍を阿吽の力によって、宇宙に広げる）で対することが出来ると思います。

「自分の心に敵を包むやうな雄大な気持ちで対すれば敵の動作を見抜く事が出来る。其処でそれに合して右、或は左にかはす事も出来る。又敵を自分の心に抱き込んだら自分が天地より受けた処の道に敵を導くことが出来る。」（練 7、神 97）

「呼吸力」の実技化

呼吸力の養成法があるので呼吸力を使った技は実技化出来るはずですが、3 カ月と言わず 3 年経っても自分のものにならないのは、「呼吸力とは何か」が掴めていないためでしょうか。

開祖が「一霊四魂三元八力や呼吸、合気（△○□）の理解なくして合気道を稽古しても合気道の本当の力は出てこないだろう」と仰っているのはそのところだと思います。

改めて座学の資料の図や道文に戻って、前述の呼吸力の各要素を実技の稽古の際の順序に並べ替えてみましょう。

- ① 自分の心に相手を包むような雄大な気持ちで立つ（対峙した時）。
- ② 相手を自分の腹中に吸収する（相手が近づいて来る時、△：入身一足）。
- ③ 臍下丹田又は正中軸が動くことにより結ぶ（接触した時、○：円転）。
- ④ 一体化して、無限大の宇宙の中心が動けば、無限大であるが故に一切の場所が中心となり（これを「^{ぜんいつ}全一」という）、宇宙全体と一緒に動く^{ぜんいつ}と念じて技を施す（□：固成）。
- ⑤ 技を施す際、万有愛護の心を以て、無限大の宇宙一杯に神の気を吐いて浄める。

座学の資料の図に従えば、①が  で、②が  になります。③、④、⑤はまとめて  になるのではないのでしょうか。

①については後程詳述します。とりあえず③以外はイメージで行えますが、③の「結び」は体の操作を伴います。この操作は「結び」の理合（技術）とメカニズムに述べたとおりです。

我々が予測的姿勢制御を行っていることに気付くのは、故障などで止まっているエスカレータに乗った時です。思わず転びそうになったり、違和感を覚えたことがあると思います。ある研究によると、停止エスカレータに乗り込むまでは、「止まっているエスカレータ」として適切に認識していても、乗り込んでから、「動いているエスカレータ用」の運動プログラムが潜在的に駆動されている可能性が示されたという結果が得られたそうです（福井隆雄ら『電子情報通信学会技術研究報告』NC, ニューロコンピューティング

106(407), 37-42, 2006-11-28)。

殆どの場合、手首を掴もうとして取りに来る人は上から押さえ気味に握るようです。そして、技を掛ける人（取り）がその手首を持ち上げたり（撥ね上げたり）、手首を引き抜こうとする動作に対して予測的姿勢制御（フィードフォワード制御）が働くようです。取りの動きを封じようとか、取りの対応によって崩されまいとする運動プログラムが潜在的に働き、反射運動で受けが身体のバランスを保とうとするので、取りが手首を振り上げたり、振り解こうとして手首を引くと抵抗が生じます。

大抵の場合、受けの母指球に取りの手を当てて動かしたりしますが、それだけでは吸収されたという感じは得られません。注意すべきは、腹中に吸収して結ぶ稽古をする時は、受けも軽く小指で取りの手首を握り、取りのどこが動いているかを感じ取れる稽古をすることかと思います。

10-10=0（ゼロ化）ではなく、相手の不足している所を補うといった「五五十 二八十 一九十」が、この腹中での結びになります。「十」は一体となったことを表しています。「合気道は赤玉、白玉じゃ」と開祖が話された言葉も同じ意味です。新陰流の「自分と敵との人中路（正中軸）を真直ぐに合わせ、自分の人中路を真直ぐに切り通す」という理合と同じです。

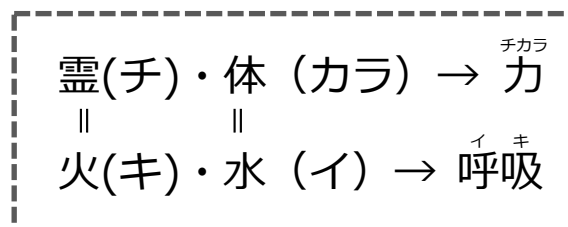
自分の心に相手を包むような雄大な気持ちで立つことはイメージで出来ませんが、相手の動作を見抜く事が出来るという段階にまで至るのにはもっと工夫が必要なようです。開祖は、鎮魂の行によってそれを得られたそうですが、山岡鉄舟は、参禅すること 17 年にして浅利義明の幻影が眼前から消え、この雄大な気持ちを得られました。それが「ゆるやかに動かず行けば気は敵をおおい通すぞ不思議なりける（一筋にするどく気迫を込めて相手に当たると、かえって気が通じず、むしろゆったりとしていれば、気が相手を包んでしまう）」（山岡鉄舟）という言葉となっています。

「天地人和楽の道の合気道 大海原に生けるやまびこ この山彦の道がわかれば合気は卒業であります。」（神 182）もこの最終段階を表した言葉かと思います。

工学博士の政木和^{かずみ}三先生も小学校 3 年生から腹式呼吸（20 秒間息を吸い、20 秒間止め、20 秒間で吐き出す）をマスターした結果、脳波がシータ波になり、1 年間で 300 分の 1 秒間に短縮されるようになったそうです（1 秒間が 300 年になり未来予測が出来る）。「脳波をシータ波にするには、腹式呼吸を極めること、信ずること、そして無欲になることで脳波を下げればいいのである。」（『無欲の想念』が成功をもたらす 未来への発想法』57）と教えられています。

補足

呼吸力は、「二^{ふた}は力^{ちから}也、吹く^い呼吸^き也」（呼吸は力である）から来たと推測しましたが、言霊学的には次のように説明出来ます。霊（ヒ）は火、体（ミ）は水であることと併せて理解すると良いと思います。



『「霊」は本邦の古語では「ヒ」であり、又「チ」である。又「体」の邦音は「カラ」であり、又「カラタマ」である。元来、「体」は霊を宿すべきもので、言わば中身無しの容器である。即ち「体」は^{から}殻、^{から}空等と同一義を有する。（中略）「力」は即ち^チ霊、^{カラ}体で、霊体二元の結合という事である。』（『出口王仁三郎著作集』第1巻 神と人間 大本略義 一元と二元）

「既に古事記の^{かみよ}神代の巻と唱るも、^{カミヨ}火水與の巻の云義にして、天地の^{イキ}水火を^{くみ}與て^{ものいふ}「言」ことの^{みつたへ}御伝なり。天地の間に眼に見えざるの^{ひみつ}火水あり。是を^{カミ}火水といふ。^{イキ}水火ともいふ。神と唱るは^み躰（本体）にして、水

火と唱るは用（働き）なり。故に、陰陽と陰陽と與て万物を産なり。」（水穂伝附言）

『と、次の瞬間には一転して「合気道とは言 靈の妙用なり」と、たとえば「ス」声（愛の言靈）あるいは「ウ」声（結びの言靈）などのはたらきと呼吸力とのかかわりにふれ』（開 23）ということなので、開祖が「呼吸力」という言葉が使われていたことは確かです。

昭和 8 年に「心と体及び力が全く一致して統一しなければならぬ」（練 12）と教えられ、また昭和 13 年に「氣力（氣はイキとも読める）」（道 36）と言っていたものの理合（技術）を変えず（或いは改善せず）に、「呼吸力」と名称だけを変更をされたのではなさそうです。

「心と体及び力が全く一致して」という言葉は「宇宙間に発生した靈素(チ)と体素(カラ)が結んで靈素(チカラ)、いわゆる力が生まれる」（靈界物語 4-9-50 参照）という大本の教えに基づいています。

「氣力の養成」に「掌を内に向け、指先に力を入れて精神を集中し、刀を振り被る心持にて敵を押しつつ両前臂を挙げ」（道 37）という説明がありますが、これが後の「両手先を通じて力が流れ出るような形で相手の両肩の方へ、自己の両手を柔軟に伸ばし、両手内側へ螺旋状に突き上げる。」（技 80）という「呼吸力の養成」の説明に繋がっています。

開祖は、昭和 26 年に「戦前は解らず力で稽古していた。今は力は不要。此れが武産合気じゃ」と申され、昭和 20 年の終戦後の白い幽体との稽古（武 81、神 14 参照）によって変わったことを弟子に伝えられています（赤沢善三郎「戦後大先生が、“たけむす”っていう名前を使うようになった」）。

このことから、この白い幽体との稽古以前と以降で理合（技術）に変化があったと考えるのが妥当かと思えます。

神示により「武産合気」を世に出した中西光雲・清雲夫妻とは開祖が個人的に交流され、岩間駅を挟んで反対側にある夫妻の家を訪ねられたり、合気神社の付属道場の前に三畳ばかりの小屋を建て、そこに光雲氏が通って来られたりしていました。しかし、当時のお弟子さんは、両者がどういう間柄で何をされているのかほとんど知りませんでした。

夫妻は、昭和 36 年に岩間を離れられましたが、その前に神事の執り行い方で行き違いが生じ、やがて光雲氏も三畳の家に通って来られなくなった、とのこと。夫妻には神変大菩薩（修験道の祖 役小角）から授かった方式があり、開祖は大本式を頑なに守られたようです。

開祖が「氣結び、生結び」という言葉を度々口にされていますが、最後にその意味を掲げます。生結びが「結び」の理合（技術）とメカニズムで述べたものになろうかと思えます。

「氣結・生結・和久結・穗結」

此の現世の凡ての事毎は、皆神と一切万有及万有相互間の氣結・生結・和久結が本となつて 営 まれてゐる。

例へば茲に一組の男女が居る、互に好意を持合ふ、是が氣結（気だけの結、則ち心だけの結）である。次に具体的に家庭生活を営む、是が生結（心と物の結合ひ・価値ある使命の結）である。其の結果子供が生れ、其の子供と親とが夫々に、生きる価値を持寄り一致協力して一家を形成し、勲・誓を仕上げ掲げて、国家社会に貢献する活躍活動をなしてゆく。是が和久結（心と心・心と物・物と物の結合ひに依り、凡てを綴り・繋ぎ・包み・大調和の丸き玉の巡りとなす、即ち全人類を総合調和する理性理想の平和に結ぶ八紘一宇の大 倭 現 国 玉の結の意）である。従つて其の意義は其の場合場合に依じて如何程でも大きくも、小さくもなるのである。

此場合夫婦の間に子供等が生れ、其の子供等が又夫々親となつて、沢山の孫等が生れる。斯様に次々と横の結を以て、弥栄に殖え・増し・稔る 結 を穂結と云ふ。即ち天と地・淤能碁呂島と万有・陰と陽・左と右、凡て 函蓋（はことふた）相応して和する、花と実と種の造化の顕現の結の意を云ふ。」（『ことたま』

に依る十種太祓（布留部祓）の解明』中西光雲著 222、『猿田毘古命祝詞』中西光雲著 5 によって波線の下線部補足)

これまで述べてきたことにより「大先生は断片的に話されるので、聞く人によってはひじょうに分かりにくいわけなのです。(中略)しかし何度もお目にかかり、お話を素直にお聞きしているうちに、奥深いところから割り出されているのだという前提でお聞きすると、断片的なものが、自然につながっていくから不思議でした。」(開 24)といわれている開祖の言葉の奥深いキーポイント(呼吸力)が理解出来たら、道文の理解が進むと思います。

「合気とは敵と戦い敵を破る術ではない。世界を和合させ人類を一家たらしめる道である。即ち、合気道の極意は、己を宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。修行者は、このことを日常の鍛錬を通じて悟るべきである。」(合気道講習会用テキスト)

「合気道とは真の武であり、愛の御働きであります。この世のすべての生物の守護の道です。すなはち、この合気道は、すべてを生かす羅針盤であり、今日までの武技を産み出してきた武産の現われで、その生れて来るところの武は万有の生成化育の法に^{のり}ふして万有の生長を守る法であります。万有万神(原文は万真)の条理を明らかに守る大和魂(至仁至愛の大精神)をねり、大成する産屋^{うぶや}です。すなわち正勝・吾勝・勝速日の道に住して、大民主主義、大自由主義たる最も幸福なる祭政一致の本義を明らかにする、言霊の妙用であります。」(技 260、武 30 も同)

道文に「呼吸力」という言葉が出ていないと述べましたが、上の二つの道文を読んでもみると、道文の殆どが「呼吸力」についての説明になっているが故に取り立てて書かれていないのではないかと思います。

開祖が使われた言葉の初出と伝承

- ・ 呼吸、水火：山口志道^{しどう} (1765-1842) → 望月幸智^{おおいしごりま すみ} → 大石凝真素美^{うぶや} → 出口王仁三郎
『水穂伝』
 - ・ 一霊四魂三元八力：本田親徳^{ちかあつ} (1822-1889) → (長澤雄楯^{かつたて}) → 出口王仁三郎
『真道問対(真道問答)』、『道之大原』
 - ・ 三元(三玄)、もちろ、武産、さむはら：中西光雲(1892-1969)・清雲(1917-2004)
『「ことたま」に依る十種太祓(布留部祓)の解明』、『猿田毘古命祝詞』他
(『「言霊の解」神授の「古事記(上巻)」』即ち『布斗麻邇古事記』は発行されなかった。)
- ※ 本田親徳の三元は「剛柔流」、中西夫妻の三元は「△○□」

引用文献の略称

練：『武道練習』植芝守高(盛平)著(昭和8年刊)
道：『武道』植芝守高(盛平)著(昭和13年刊)
合：『合気道』植芝吉祥丸著(昭和32年刊)
新：『合気道新聞』(昭和34年創刊)
技：『合気道技法』植芝吉祥丸著(昭和37年刊)
真：『合気道開祖植芝盛平』砂泊兼基著(昭和44年刊)、現在、『武の真人』(頁番号が異なる)
開：『合気道開祖植芝盛平伝』植芝吉祥丸著(昭和52年刊)
武：『武産合気』高橋英雄編著(昭和61年刊)
神：『合気神髓』植芝吉祥丸監修(平成2年刊)
探：『合気道探求』(平成3年創刊)
悟：『合気道で悟る』砂泊誠秀著(平成4年刊)